

## 日韓文化交流会議 第7回全体会議開催

日韓文化交流会議は、2006年9月16日、東京（ホテルオークラ）において第7回全体会議を開催しました。



国民レベルの多様化した交流を評価し、さらなる促進のための方策が話し合われた

今回の会議は、一昨年（2005年）の「日韓友情年」を経て、日韓の関係が新たな次元を迎える中での開催となりました。

会議冒頭、日本側の平山郁夫座長は、「日韓関係は良好な関係を維持しているが、いくつかの懸案問題も存在している。このような時にこそ、自分たちが自由な立場から未来志向の意見を交換し、両国間、さらにはアジア、世界の平和に貢献したい」と述べました。続いて、韓国側の金容雲座長は、「日韓間の大衆文化交流の拡大や、相互訪問者数の増大など、

極めて心強い事例もあり、さらなる交流・相互理解促進のための努力を継続していきたい」と述べました。

続く二つのセッションでは、日韓双方の委員が、それぞれの専門の立場から、次のような要旨の意見を提示しました。

(1) 日韓関係が互いの国益から自由であることはないが、両国国民の間に、あらゆる問題に対し文化的、理性的に対処できる共通の意識が涵養されていくことを期待する。

(2) 互いの文化を日常的な存在と感じ、互いを受け入れやすい青少年の交流に焦点をあてていくべきである。

(3) 交流の主体が官から民へと移行しつつあるが、この動きをさらに促進すべきである。

(4) インターネット上での日韓の市民のやりとりには、以前は互いについて知識のないままの批判が多かったが、現在は批判しつつも衝突を重ねることによって相手に対する理解を深めている。「プラスの衝突」といえる面もある。

(5) 懸案である「歴史認識」の問題については、両国の文化・歴史に関するあらゆる角度からの対話・考察が積み重ねられてはじめてその糸口が得られるものであり、この方向での進展を期待したい。

### 日程

9月16日（土）

<第1部 司会：平山郁夫座長>

●開会挨拶

- 日本側 平山郁夫座長
- 韓国側 金容雲座長

●議題1「日韓の文化交流に関する全般的なレビュー」

- 韓国側 柳鈞副座長
- 日本側 松尾修吾副座長

●自由討論

<第2部 司会：金容雲座長>

●議題2「日韓市民意識と日流・韓流」

- 日本側 小此木政夫副座長
- 韓国側 林貞希委員

●自由討論

### 日韓文化交流会議メンバー

日本側（座長、副座長以外は五十音順、敬称略）

韓国側（座長、副座長以外はかな順、敬称略）

- 平山郁夫（座長） 日本画家
- 小此木政夫（副座長） 慶應義塾大学法学部教授
- 松尾修吾（副座長） 国際交流基金 日本語国際センター所長
- 饗庭孝典 東アジア近代史学会副会長
- 亞洲奈みづほ 作家
- 新井 満 作家
- 千 玄室 前裏千家家元
- 芳賀 徹 京都造形芸術大学学長
- 広中平祐 財団法人数理科学振興会理事長
- 黛まどか 俳人
- 水谷幸正 浄土宗事務総長

- 金容雲（座長） 数学文化研究所所長
- 柳 鈞（副座長） 韓国放送映像産業振興院院長
- 鄭求宗（副座長） 東亜ドットコム代表理事
- 金然鐘 秋溪芸術大学校文化産業大学院院長
- 都正一 民族文学参加会議諮問委員
- 李柱益 ボラム映画社代表理事
- 李惠慶 ソウル女性映画祭執行委員長
- 林英雄 劇団「サヌリム」代表
- 林貞希 (社) 明るい青少年支援センター代表
- 千柄泰 釜山大学校法科大学教授
- 崔成泓 元外交通商部長官

# 第6回日韓歴史家会議

2006年10月27～29日の3日間、都内で第6回日韓歴史家会議が開催されました。「歴史家はいま、何をいかに語るべきか」を主題として、両国の歴史研究者が熱のこもった討論を繰り広げました。

日韓歴史家会議は、日韓両国の歴史研究者が相互に対する理解を深め、交流と協力の輪を拡げる両国歴史研究者間の「交流の場」とすることを目的に2001年に発足したものです。専門とする地域や時代、分野を超えて、両国の歴史研究者が歴史学の新しい研究動向などに



さまざまな専門の歴史研究者が討論を行った

ついて幅広く意見を交換する場として、過去5回の会議では、「1945年以後の日韓両国における歴史研究の動向」「世界史の中の近代化・現代化」「ナショナリズム：過去と現在」「歴史研究における新たな潮流：伝統知識の役割をめぐって」「歴史における宗教と信仰」という主題のもとで発表・討論を行ってきました。

28、29日の2日間にわたって開かれた今回の会議では、「歴史家はいま、何をいかに語るべきか」をテーマとして、「いま」という時代をどのようにとらえ、またその中で歴史家に課せられている課題は何か、という視点から、活発な討論が行われました。

第1セッション「戦争と平和の問題—平和の観点から歴史像を書き換える」では、戦争を巡る記憶を歴史家としていかにとらえていくかについて論じられました。第2セッション「‘記憶’をめぐって—歴史を語る主体の多様化と歴史家の位置」においては、記憶というものの性格と記憶への歴史家のかかわり方が議論されました。第3セッション「文明としての歴史学—歴史家の被拘束性と国際歴史対話」では、歴史をめぐる国際対話において歴史家が自らの非拘束性をどのように認識し、またそれを乗り越えていく方向はどこにあるのか、具体的な事例を交えての議論が行われました。

会議初日の27日には、恒例の行事である記念講演会「歴史家の誕生」を開催し、両国を代表する歴史家である樺山紘一（東京大学名誉教授（国際歴史学会議副会長））と、柳永益（延世大学校碩座教授）が講演を行いました。



第2セッション。「記憶」への歴史研究者の関わりに議論が集中した

## 日程

10/27 (金)

### 開催記念公開講演会「歴史家の誕生」

樺山紘一（東京大学名誉教授）  
「歴史家の国際化を求めて—国際歴史学会議（CISH）のメッセージ」  
柳永益（延世大碩座教授）  
「韓国近現代史晩学徒の研究遍歴—甲午更張(1894)から大韓民国建国(1948)まで」

10/28 (土)

### 主題：「歴史家はいま、何をいかに語るべきか」

#### 1. 戦争と平和の問題—平和の観点から歴史像を書き換える

司会：木畑洋一（東京大）  
日本側報告：油井大三郎（東京女子大）  
「第二次世界大戦と「脱近代」意識の相剋」  
討論：都珍淳（昌原大）  
韓国側報告：鄭杜熙（西江大）  
「李舜臣に対する記憶の歴史と歴史化—勝敗論に閉じこめられた‘壬辰倭乱’認識と韓国人の対日観—」  
討論：村井章介（東京大）  
全体討論

#### 2. ‘記憶’をめぐって—歴史を語る主体の多様化と歴史家の位置

司会：井口和起（京都府立大名誉教授）  
韓国側報告：安秉稷（ソウル大）  
「韓国社会における「記憶」と歴史」  
討論：笠原十九司（都留文科大）  
日本側報告：富山一郎（大阪大）  
「歴史記述における感情記憶の問題—沖繩戦の証言から」  
討論：金容徳（東北亜歴史財団）  
全体討論

#### 3. 文明としての歴史学—歴史家の被拘束性と国際歴史対話

司会：宮嶋博史（成均館大）  
日本側報告：柴宜弘（東京大）  
「国際歴史家対話—バルカン（南東欧）11カ国の場合」  
討論：林志弦（漢陽大）  
韓国側報告：李泰鎮（ソウル大）  
「韓国近現代史認識の歪曲と錯乱」  
討論：濱下武志（龍谷大）  
全体討論

10/29 (日)

#### 4. 総合討論

司会：宮嶋博史（成均館大）  
木畑洋一（東京大）

## 記念講演「歴史家の誕生」

### 歴史家の国際化を求めて—国際歴史学会議(CISH)のメッセージ— 樺山 紘一

国際歴史学会議 (Comité International des Sciences Historiques: 略称CISH) は、1898年にハーグで第1回大会が開かれた。1926年の常設機関化以来、各国内委員会代表が組織全体を運営するという原則を持っている。現在までに20回の大会が行われ、歴史家たちを統括する会議として影響力と実績を残してきた。

近代以降の国家間の対立は、歴史家の間にも分裂と対立を招いたが、CISHは歴史家同士の交流によって歴史家にとっての世界的な共同体を構築できるという確信を持ち続けた。大会では歴史学の潮流やあり方が議論され、新たな課題や解決方法が発見された。

日本は1898年以来、戦争による中断はあるが、継続して大会に参加してきた。韓国は1960年から国内委員会として正式参加している。日韓の国内委員会は6年前から「日韓歴史家会議」を毎年開催しているが、こうした密接な二国間関係は他に例を見ず、組織を通すことでより多くの歴史家たちが相互に連携し得ることを実績として示している。

私は1990年の大会が初参加で、2005年にはCISHの副会長に選出された。機関間にさまざまなチャンネルが創設されることで、個々の歴史家はもとより、各国の歴史学のあり方が変革されていくに相違ない。若い歴史家たちが、より積極的に

CISHの活動に参加してほしい。

CISHが現在抱える課題としては、第一に、専門や課題ごとの研究会単位の国際連携の方が有用ではないかという議論が存在している。第二に、個別の地域相互のつながりをより重視していく必要がある。第三に、グローバル化の観点から個別な存在がどのような意味を持つかという点である。4年後の第21回大会に向けて、今後のCISHの展開を考えていきたい。



### 韓国近現代史晩学徒の研究遍歴—甲午更張(1894)から大韓民国建国(1948)まで— 柳永益

政治家を志してソウル大政治学科に入学した本人にとって、転機となったのは米国留学だった。1960年の4.19学生革命直後に奨学金を得て渡米し、ブランダイス大で世界的碩学の講義を受けて学問の素晴らしさを悟り、学者をめざすに至った。韓国史がまだ近代的な学問として確立していないと感じ、近現代史を専攻する



ことに決めたのは、26歳の時だった。

その後ハーバード大学院に進学し、日本が韓国人改革派官僚を動員して推進した改革運動「甲午更張」を研究テーマ

に選んだ。研究の過程で日本の外交文書や戦前の研究に接し、その限界を乗り越えるために、日本の対韓政策に批判的にアプローチしつつ、当時の韓国人指導者の思想と行動を明らかにした。この研究は「甲午更張：朝鮮-日本の改革努力」という博士学位論文にまとめられた。

米国と韓国での研究生活の中で、甲午更張に関する多くの論文を執筆・発表した。これらは2冊の著書として出版された。そのうちの1冊は、日本の研究者によって翻訳され、『日清戦争期の韓国改革運動：甲午更張研究』として日本で刊行されている。

1994年からは、初代大統領李承晩の養子・李仁秀博士の要請により、李承晩文

書の整理事業に従事している。1997年以降は財閥からの支援を受け、文書を延世大に移し、現代韓国学研究所初代所長として、史料集の編纂、国際学術会議の開催、論文集の刊行などを行った。個人としても李承晩関連の著書や論文を発表している。

韓国現代史研究はこの世で最も困難なことのひとつだと思う。「晩学」でありながら、「歴史家」として「誕生」できたのは、①韓国現代史を探究するという強い意志、②長期間にわたる十分な奨学金、③素晴らしい教授たちの教え、④完璧な研究施設(図書館)という四つの条件が満たされたことによると考える。

## 参加者

### 日本側 (敬称略、50音順)

井口和起 (京府立大名教授、日本近代史)  
伊集院立 (法政大、ドイツ現代史)  
板垣雄三 (東京大名教授、イスラム史)  
笠原十九司 (都留文科大、中国近現代史・東アジア近現代史)  
片岡一忠 (筑波大、中国史)  
樺山紘一 (東京大名教授、西洋中世史)  
岸本美緒 (東京大、中国近世史)  
城戸毅 (東京大、英国中世史)  
木畑洋一 (東京大、英国現代史)

久保享 (信州大、東洋近代史)  
小谷汪之 (東京都立大名教授、インド中世・近代史)  
近藤成一 (東京大、日本中世史)  
佐々木隆爾 (日本大名教授、日本現代史)  
佐藤信 (東京大、日本古代史)  
柴宜弘 (東京大、バルカン史)  
竹中享 (大阪大、西洋史学)  
富山一郎 (大阪大、歴史学・文化理論)  
西川杉子 (東京大、近世イングランド史)

西川正雄 (東京大名教授、ヨーロッパ現代史)  
濱下武志 (龍谷大、アジア近代史)  
三谷博 (東京大、日本近世近代史)  
宮嶋博史 (成均館大、朝鮮史)  
村井章介 (東京大、日本史学)  
油井大三郎 (東京女子大、日米比較文化・現代国際関係史)  
李成市 (早稲田大、朝鮮史・東北アジア史)

### 韓国側 (敬称略、가나다順)

金基鳳 (京畿大、西洋史)  
金榮漢 (西江大、西洋近代史)  
金容徳 (東北亜歴史財団、日本史)  
都珍淳 (昌原大、韓国現代史)

閔賢九 (高麗大、韓国中世史)  
朴元鎬 (高麗大、中国史)  
安秉稷 (ソウル大、西洋史)  
延敏洙 (東北亜歴史財団、日本古代史)

吳星 (世宗大、韓国近世史)  
柳永益 (延世大、韓国現代史)  
李基東 (東国大、韓国古代史)  
李泰鎮 (ソウル大、韓国近代史)

林志弦 (漢陽大、西洋近代史)  
鄭杜熙 (西江大、韓国近世史)  
車河淳 (西江大名教授、思想史)

## 国際戦争としての 豊臣秀吉の朝鮮侵略

1592年に起こった豊臣秀吉の朝鮮侵略を韓国では壬辰倭乱と呼ぶ。この戦争に対する研究では、韓国側では「国難克服」という側面が強調され、個人的なテーマに迫るか、特定の人物を英雄化する傾向が濃い。反面、日本の場合は国内統一と戦国時代の收拾を経て近世国家としての体制を整備したという肯定的な意味で研究実績が豊富で、専門の研究者も少なくない。

しかし何よりもこの戦争は秀吉が16世紀末、計画的に起こした侵略戦争に朝鮮と日本、明のみならず、ポルトガルをはじめ西洋人と琉球および東南アジアの兵士など、延べ60万人以上が参加した「国際戦争」であった。

このような事実にもかかわらず、今まで壬辰倭乱に対する韓中日三カ国の既存研究はほぼ自国の国内文献を主として進められ、戦争相手側の史料や関係文献に対する研究はなおざりにされてきた。このように韓中日三カ国がそれぞれ自国史の枠組みの中でこの戦争を理解し、民族主義的観点から解釈したために、戦争状況に対する歴史的評価に偏向せざるを得なかった。このような研究の枠が持つ限界を超え、客観的視点の基、壬辰倭乱史を正しく理解する方法は三カ国の歴史資料を同一線上に載せ批判的な立場で厳密に分析し、客観的事実を再構成することである。そのため、この度の来日研究の目的とは、日本関連の基礎資料を再整理し、この時期の韓国側研究者に日本関連の基礎資料を紹介することにより、各国史料の比較検討を通じ、この戦争の時間的な推移を明白にし、一国史の

枠組みを超えて総合的な理解に役立つ基礎作業とするものだった。ただし、この時期の史料はその量が膨大で地域資料も豊富であることから、今回は東京大学史料編纂所に所蔵されている目録を中心に調べた。

## 刊行物と編纂物

この戦争に関連し、日本の史料の中で最も一般的で基礎的な史料として次の刊行物、編纂物が挙げられる。武家文書が多く載っている『大日本古文書』と『大日本史料』『大日本古記録』『改定史籍集覧』『続群書類従』『続々群書類従』『史料纂集』などが代表的である。『大日本古記録』の場合には14冊中3～10巻が天正16年（1588年）から慶長5年（1600年）までで戦争と関連した内容が集中している。『改定史籍集覧』には通記類を中心に合戦内容が多数含まれる。一方、『続群書類従』『続々群書類従』の場合には「加藤家伝清正公行状奇之巻」などがあり、『史料纂集』の場合には公家側と関連したものが載っている。以上の7巻は活字化されており、韓国側の研究者たちが便利に活用できる最も基本的な資料といえる。

編纂物では「黒田家譜 朝鮮陣記」「吉川家譜」「高山公実録」「征韓録」などが挙げられる。これら編纂物の大部分は大名の戦功を誇示するために編纂された場合が多かったため、精密な史料批判と他資料と比較検討した後、に引用するのが望ましい。また日本の場合、『朝鮮王朝実録』『明実録』のように国家主導でつくられる編纂物がないことも特徴で、上述の編纂物は大部分『県史』として出版されるか、大名

家の記録物として伝えられてきた場合が多く、直接現地に赴き確認することも必要だ。

## 日記と覚書

日記の類の史料は朝鮮と日本の双方に比較的多く残っている。この時期の日本の日記は、①戦争初期の戦況を知らせる従軍僧の日記、②大名の家臣の従軍日記、③国内事情を記録した過程でこの時期の戦争内容を記録した日記、の3つの類型が挙げられる。①の場合「西征日記」「朝鮮日記」「朝鮮日々記」があり、②の場合「吉見元頼朝鮮日記」「大河内秀元朝鮮日記」「吉野日記」「高麗日記」「大和田重清日記」、③には「鹿苑日録」「義演准后日記」「多聞院日記」「南禅日記」が代表的である。

覚書の場合には単に自身の記録や大名の功績を残すために書かれたものが多い。例を挙げると「清正高麗陣書」「九鬼四郎兵衛勳之覚」「梨羽紹幽物語」「大重平六高麗覚書」「本山豊前守安政戦功覚書」「菱刈休兵衛朝鮮奉公覚」「吉野甚五左衛門覚書」が該当するが、このような覚書と日記は戦況に関することのみならず、朝鮮での細かく生々しい状況が記録され、武家文書のような書状では知り得ない日常的な情報まで接することができ、その史料価値は高いといえる。

## 東京大学史料編纂所所蔵文書

秀吉の朝鮮侵略についての影写本史料は主に東京大学史料編纂所と国立公文書館内閣文庫、前田育徳会尊経閣文

庫などに所蔵されている。ここでは史料編纂所を例にとると、『東京大学史料編纂所データベース』で検索した後、『東京大学史料編纂所写真帳目録』索引編を参考に必要な史料を検索すると便利だ。その結果、多く引用されているものでは「南部文書」「黒田文書」「神田孝平氏所蔵文書」「金井文書」「益田孝所蔵文書」「富田仙助氏所蔵文書」「宇都宮高麗婦陣物語」「太田牛一雑記」「九鬼文書」「中田文書」などがある。ここに所蔵されているものの中で未だに十分に活用されていない史料が少なくないため、研究テーマと関心分野によって、より綿密に調査すれば興味深い史料に接することができるだろう。

一方、史料編纂所で注目されるのは「島津家文書」である。島津家が特に重要視していた文書は黒漆塗箱で保管されていたが、秀吉に関連する史料もその中に多く入っていた。『大日本古文書』の「島津家文書」と重複する部分もあるが、秀吉の側近たちと島津氏との関係や、朝鮮侵略が起こる前の1587年から戦争が終わるまでの経緯などを知ることができる資料だ（史料編纂所から刊行された『島津家文書目録改訂版』（第1分冊、2002年）、『島津家文書目録』（黒漆塗箱分、1996年）、『島津家文書目録フィルムインデックス1』を参照）。

### 地方所蔵文書

他にも県や市が中心に資料を収集し活字化したものが多数ある。『大分県史料』の「大友家文書」、『広島県史-古代、中世資料編Ⅱ』の「厳島文書」、『鹿児島県史料』の「島津家文書」な

どである。また『小浜市史-諸家文書編』の「組屋文書」、『宇土市史研究第26-宇土市教育委員会』の「小西行長基礎資料編」、『清文堂史料叢書98-上野市古文獻刊行会』の「高山公実録<藤堂高虎伝>」が市を中心に編纂したものである。『本妙寺歴史資料調査報告書-古文書編』の「本妙寺文書」、『福岡市博物館』の「黒田文書」、『大宰府・太宰府天満宮史料-17』の「立花文書」、『神戸大学文学部日本史研究室編』の「中川文書」も注目に値する。

### 日本史料を調査して

ここ数年、日本では豊臣政権期の壬辰倭乱関連史料および古文書を整備する作業が活発だった。北島万次氏と三鬼清一郎氏が代表的な例だ。北島氏は『壬辰倭乱-秀吉の朝鮮侵略-関係史料稿本1~3』（2005年）を発刊し、後者は『稿本 豊臣秀吉文書1』（2004年）と1999年に刊行した『織田・豊臣政権研究目録』を補完する作業をしている。このような作業に共同で参加し、まず韓日間の史料だけでも収集整備する作業が優先されるべきだろう。また、韓国側では今まで述べた内容の日本史料を目録化し解説する作業を急がねばならない。ただし、このような作業を



東京大学史料編纂所。著者が当基金訪日フェローとして滞在研究を行っていた

韓国で行う場合、日本の古文書を読み、解読できる専門研究者が必要である。現在、韓国では韓国学中央研究院と国史編纂委員会、韓国国学振興院で古文書解読と関連した授業が進められており期待される場所であるが、絶対的に研究者の数が足りない。壬辰倭乱に絡む日本史料の整備作業を1日も早く共有することに一層の努力が求められている。

#### PROFILE

キム ムンジャ



祥明大学校人文科学研究専任研究員。専攻は日本近世史・韓日関係史。2006年7月から8月までフェローとして東京大学史料編纂所外国人研究員として来日。お茶の水女子大学（修士、博士）卒業。共著書に『日本人の選択』（タルンセサン、2002年）、『戦の中の女たち』（吉川弘文館、2004年）などがある。

## 文化コンテンツとしての 蓄音機

私が国民学校（小学校）に入学する前、祖父の家に行くと「電蓄」というものがあった。その家でおじたちの秘蔵LP盤に触れようものなら大層怒られた記憶がある。祖父は植民地時代半島歌劇団の副団長を務め、大衆芸能人を率いて、地方公演を行い、解放後には映画界に身をおいていたので、祖父宅に大衆芸術に関する物が数多くあったのは自然なことだった。私の世代はウォークマンという機械が流行し、空のテープに好きな歌手の歌を録音して聞いていた。そのテープは私の幼少期、最も大切な物だったが、当時は私に限らずみんながそうだったと思う。おじのLP盤、私のテープに対する愛情に違いはなかった。この愛好の価値は蓄音機時代にまで遡る。

蓄音機（SP→LP）から始まり、



日本初の国産機「ニッポノホン」提供：コロムビアME

テープ、CD、そして現在のダウンロード音楽ファイルに至るまで、個人向けの大衆媒体の流れの中で、その元となる蓄音機とそのコンテンツに関する研究は大変重要で、必要性が高い。特に、現在の技術発達にともない、個人向け媒体は映像媒体まで含め、多くのコンテンツを大衆に提供している。衛星DMB（モバイル放送）の登場は今まで音楽のみを提供してきた文化コンテンツ部分に、映像媒体（映画、ドラマなど）まで送り出すことで、大衆がどこでも文化生産物を楽しめるシステムをつくっている。このような文化コンテンツは蓄音機の時代にも多様な文化生産物（劇、映画、漫談、ナンセンス、歌謡など）によって大衆と接していた。

蓄音機の記録した内容（コンテンツ）は韓日の人々に多様に表象されつつ、内部認識を再生産する文化的、社会的様式としての機能を果たしてきた。克服すべき対象、あるいは啓蒙の対象として、また自己文化の根源として作用した重要な仕組みだったのである。

蓄音機の研究の土台になるのは、上述の愛好品に対する所蔵者の愛蔵欲である。特に90年代から公開された蓄音機のレコードは、研究に活力を与えてくれた。修士論文として韓国の唱劇を研究し、幸運にも近代五名人の声を聞くことができたのだ。また、博士論文を執筆しな

がら無声映画の華といえる弁士の声、そしてさまざまなレコードはより実証的な研究の礎となってくれた。これらの研究成果を元に、近代国民国家形成期に大衆に影響を与えた蓄音機コンテンツが、両国のアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼし、大衆のどのような感受性に刺激を与えたかを確認することは重要な研究であり、文学が文化の領域まで拡張される重要な転機となるだろう。

## 植民地時代の蓄音機と メディアの伝播

1877年エジソンが発明したフォノグラフは「言葉をしまっておく機械」として日本に伝えられ、人々を驚嘆させた。その後、これをベルが進化させ、日本では各種芸能が録音された。これを「平円盤」と呼び、明治41年からレコードという名称で呼ばれた。当時、イギリス、フランスでは「ディスク」、アメリカでは「フォノレコード」と呼んでいたため、日本のレコードはアメリカの影響を受けたといえる。当初片面盤であったレコードは、明治43年から両面盤になった。アメリカの資本により日本蓄音器商会（日本コロムビアの前身）が設立され、日本での生産が開始された。その後、多くの会社が設立され、第1次大戦後、レコード界は好況を迎えた。昭和に入ってから電気吹込式が開発され、流行歌の媒体としてより一層の地位を占め、ヒット曲が出ればスター誕生の道が開かれた。代表的なヒット曲としては「東京行進曲」がある。西洋音楽の愛好家が増加したのもこの時期であった。

韓国の場合、1925年11月に発売され



# 第3回日韓人文社会科学学術会議開催報告

麗澤大学企画部総合政策室 堀内あゆみ

8月30日～31日に麗澤大学（千葉県柏市）にて、麗澤大学、韓国ミレニアム研究院共催による第3回日韓人文社会科学学術会議が開催されました。本国際会議は第1回が2000年1月に韓国国立国語研究院、京都大学主催によって韓国・ソウルで開催され、第2回が同年11月に韓国国立国語研究院、島根県立大学主催によって島根県立大学で開催された会議の第3回にあたります。今回は、特に2005年の日韓修交40周年を記念し開催が計画されました。

## 日韓の著名な研究者が参加

第3回にあたる本国際会議の主題は「修交40周年記念日韓学術交流の現状と展望」で、「政治・外交分野」「社会・学術分野」「言語学分野」「歴史学分野」の4つのセッションに分け、日韓修交40周年の回顧を基礎として、日韓間の主要課題を総合的に検討することによって、今後の両国の発展的関係の模索を目的としました。

今回の招待参加者は、両国合わせて30名。日韓両国の関係、会議の内容に対する関心の高さに加え、日本側座長として学習院大教授の佐々木毅氏（前東大総長）、日本側発表者として中央大教授の猪口孝氏（前東大教授）、韓国側座長としてソウル大学校教授の韓相震氏（前精神文化研究院院長）、韓国側発表者として同・李正馥氏、同・李泰鎮氏、延世大学校教授の文正仁氏（前韓国東北亜委員会委員長）ら学界で著名な方々の参加に反響も高く、多くの聴講希望者から申し込みがありました。

1日目は廣池千九郎記念講堂大会議室で午前10時に開会となりました。大会準備会日本側を代表して梅田博之・麗澤大学長が、「今回の会議が日韓の

友好と信頼の根をさらに深め、多くの成果を生むことを期待します」と述べ、続いて学校法人廣池学園・廣池幹堂理事長が、本学創立の経緯や理念を紹介しながら「両国の交流が深まり、充実した会議になることを開催校として期待しています」と歓迎の挨拶を述べました。

1日目の会議は羅鍾一・駐日韓国大使の「韓国から見た日韓両国の未来」と題した特別講演から始まりました。羅大使は冒頭、廣池理事長の案内で見学した廣池千九郎記念館に触れ「私は感動的体験をした。特に先駆者（廣池博士）が、自分の利益ではなく、社会（人類）のためにすばらしい業績を遺されていることに驚きと感動を味わった。先駆者のような立派な人の志を実現させなければならない」と力をこめて感想を述べられ、予定の原稿から離れてそのまま本題に入られました。

羅大使は、日本の軍国主義台頭の懸念、竹島問題、韓流ブームなどに対する韓国民の見方、考え方などを取り上げながら「韓国と日本は、体制、理念、特定の権力を超えて、人と人との関係で真の理解、共感がいつでもできる。発想の転換が必要だ」と日韓関係のあり方について熱のこもった講演をされました。

2日目は言語学分野と歴史学分野の2会場に分かれ、研究発表、討論が行われました。

その後、麗澤大学谷川セミナーハウス（群馬県）に移動し、泊り込みでよりくつろいだ形式と雰囲気の中、討論・交流を継続しました。日韓のより緊密な学術交流の方策を論じ、両国間の人文社会科学学術分野の学術交流の実質的な協力関係の強化のため学会設



そうそうたる招待研究者が参加した

立が提案され、設立世話人が選出されました。

## 学術交流を通して 日韓相互理解の増進を

会議を通して参加者全員が口々に言っていたことは、日韓間の様々な問題は、今回のような温かい人対人の関係の構築、交わりからこそ、解決が可能であろうということでした。実際招待参加者は、まるで久しく離れ離れになっていた家族が久しぶりに会ったかのような和やかな雰囲気、会議はもちろん、全ての場で交流を楽しんでおられるように感じました。

学術交流も含めた総合的な人的交流により、相互の問題を正面から受け止め、その上でお互いを尊重しようという思いを新たにすることができた素晴らしい交流の機会となりました。これからの互敬の精神のもと、学術交流、文化交流をひとつの手段として、両国間の相互理解を更に深めていきたいと考えています。

### PROFILE

ほりうち あゆみ



麗澤大学企画部総合政策室職員。第3回日韓人文社会科学学術会議開催のために組織された麗澤大学職員によるプロジェクトチーム（リーダー・今村稔学務部長）の一員として、準備委員会日本側代表である梅田博之学長を支え、会議開催を準備した。

## 韓国の実力派女優を招いて

立命館大学コリア研究センターでは、10月23日（月）から27日（金）まで、新たに開設された立命館大学朱雀キャンパス大講堂において、第1回RiCKS韓国映画フェスティバルを開催した。フェスティバルには、ゲストとして、韓国の実力派女優、文素利（ムン・ソリ）さんや、韓国釜山国際映画祭副執行委員長（2006）として同映画祭を作り育ててきた韓国・中央大学校映画学科長、李庸観（イ・ヨンガン）教授を迎え、上映会以外にトークやシンポジウムも開かれた。1000名以上の市民が来場し盛況のうちに行われた。

観客は、特に初日のムン・ソリさんのトークと、2日目のムン・ソリさんや李庸観教授、さらに本学の池内靖子教授、黄盛彬（ファン・ソンビン）助教授を交えたシンポジウム「韓国映画の〈女性〉像」に関心が高く、半数以上がこの両日に集中した。

トークでは、ムン・ソリさんの生い立ちと学生時代、また女優としてのデビュー過程、演技の苦労話など、興味津々な



単なる映画祭とは異なる企画に、第2回フェスティバル開催を期待する声が聞かれた

話で聴衆を惹きつけた。シンポジウムでは、李教授はムン・ソリさんが「浮気な家族」や「オアシス」の中で、かつての儒教的伝統を破る新しい主体的女性像を演じ、韓国映画の女性像の大きな転換点を作ったと論じ、池内教授は、演技論の立場から「オアシス」に見られる身体表現で新しい境地を開いたことを評価した。黄助教授は、韓国で芸術性が高いと思われている、「桑（ボン）」（日本での公開タイトル「桑の葉」）のような作品が、日本のビデオショップではボルノ物のように扱われていることに驚いた自分の体験を通じ、日韓における韓国女性像の異なるとらえ方を紹介した。ムン・ソリさんは、最近ではアジュマ（おばさん）役専門のように思われるが、デビュー以来、出演映画は自分の納得できるもの、特に自分の固定イメージを作るよりは、むしろ、常に前作のイメージを破壊し、新しいイメージを作ることにつとめてきた、と語った。

## 一人の俳優の徹底した紹介と分析

さらに、3～5日目には専門家からの映画解説やトークを行い、女優ムン・ソリとその映画世界、またその背景となった現代韓国の激動する社会様相を総合的、多角的に検討した。こうした取り組みは、当フェスティバルが単純な映画の上映会や、美男、美女を組み合わせたメ



ムン・ソリさんの話は観客を魅了した

ロドラマ中心のいわゆる「韓流」映画祭とは異なった、韓国文化分析を行う質の高いものを目指したことによる。

その成果として、ムン・ソリさんや李庸観教授から、「一人の俳優に焦点を当て、徹底した紹介と分析を行う、韓国でも見られないユニークで内容の充実した映画フェスティバルであり、韓国にもぜひ紹介したい」と絶賛を受けたことは望外の幸せであった。また、両名から、今後、毎年行われるRiCKS映画フェスティバルに対する全面的な支援と釜山映画祭などへの実行委員の招待を提案していただいたのは、全く予期しなかった成果であった。来場者からは、「ムン・ソリさんの演技力に深い感銘を受けた」「各作品から韓国現代社会の問題点を理解することができた」などの反応を得ることができた。全体として、今回の映画フェスティバルに高い評価をいただくとともに、今後に大きな期待が寄せられた。

今回の成果は、パンフレットにして記録するとともに、日韓文化交流に関心を持つ多くの方々と共有したいと思っている。また、2007年秋、「シュリ」などで日本にも知られている、個性派の俳優、チェ・ミンシクさんを招いて、第2回のRiCKS韓国映画フェスティバルを開催する予定である。

## プログラム

- 10月23日（月） ● 上映会「オアシス」+ムン・ソリ氏 トーク・イン  
 10月24日（火） ● 上映会「愛してる、マルスンさん」+シンポジウム  
 テーマ：「韓国映画の〈女性〉像」  
 出演者：ムン・ソリ氏  
 李庸観氏 釜山国際映画祭副執行委員長  
 池内靖子氏 立命館大学産業社会学部教授  
 黄盛彬氏 立命館大学産業社会学部助教授  
 司会：富田美香氏 立命館大学文学部助教授（映像学部着任予定者）  
 10月25日（水） ● 上映会「浮気な家族」「オアシス」+李庸観氏トーク  
 10月26日（木） ● 上映会「大統領の理髪師」「愛してる、マルスンさん」+李香鎮氏トーク  
 10月27日（金） ● 上映会「ペパーミント・キャンディー」「大統領の理髪師」+佐々充昭氏トーク

## PROFILE

### ソ スン



1945年京都生まれ。立命館大学法学部教授。同大学コリア研究センター長。東アジアにおける重大な人権侵害とその回復および、和解と平和に関して研究。編著書として「現代韓国の安全保障と治安法制」（法律文化社、2006年3月）などがある。

## 日韓コラボ映画『けつわり』

映画『けつわり』監督(東京外国語大学朝鮮語専攻) 安藤大佑

昨年開催された「シネマコリア2006」において私の監督作である短編映画『けつわり』\*が上映された。『けつわり』は戦時中の福岡・筑豊の炭鉱を舞台に朝鮮人坑夫と日本人の少年との交流を描くドラマで、祖父の実話から構想した。主演は韓国人俳優のヤン・イクチュン氏。朝鮮人坑夫役を実際に韓国人俳優に演じてもらい、他に類を見ない「日韓コラボ自主映画」を完成させた。

## 韓国映画の現場

2005年、韓国留学中だった私はふとしたきっかけで『まぶしい一日』という映画の現場にスタッフとして参加することになった。この作品は日韓関係を日常レベルで描いた3つのエピソードからなるオムニバス映画で、同じく日韓関係をテーマにシナリオを構想していた私にとっては非常に印象深い仕事であった。その現場でイクチュン氏と出会うことになる。それ以前に映画祭で彼の主演作を見て演技に感動していたこともあり、すぐに打ち解けて現場でもよく話をするようになった。

その後もイクチュン氏とは交友を深め、彼が監督・主演を務めた短編映画『마라만 본다 / Always behind you』にスタッフとして参加したこともあった。



『けつわり』撮影風景

映画の現場で様々な人と出会ったが、日本人と話すのは初めてだという人も少なくなかった。互いの言葉を勉強している人同士の交流とは違う、新鮮さや珍しさがあったが、そこでは、私自身が日本人のイメージに直結するという緊張感も少なからずあった。幸いにも私は現場のスタッフたちと親しくつきあうことができ、日本人のイメージアップに貢献できたのではないかと思う。大袈裟なようだが、それが実際に肌で感じた現場での交流の印象だ。

ただ、日韓合作映画では製作スタイルや国民性の違いから問題が発生することも多い。しかも長期間にわたって寝食を共にするロケなどでは尚更だ。1つの目的の下に集まったがゆえの連帯感を感じながらも、そこはやはり似て非なる外国人、些細なことからの異文化理解の難しさに直面し、それが実務的な問題に発展することも度々あった。

## 映画製作の場での交流

『けつわり』の製作にあたっては、準備が具体化する前からイクチュン氏の起用を考え、彼は突然のオファーにもかかわらず快諾してくれた。早い段階から韓国語のシナリオも用意し、韓

国語のできるスタッフも配置したが、それでも現場でどうなるかは未知数で不安が大きかった。しかし実際にクランクインするとそれは杞憂であった。あまり言葉が通じなくても、スタッフ、キャストらは終始イクチュン氏と積極的にコミュニケーションをとっていたし、彼の演技に他のキャストも刺激されて、現場の空



俳優ヤン・イクチュン氏と

気が引き締まるということもあった。小学生の子役たちも彼になついで、楽しそうに遊んでいた。撮影を終えて撤収するとき、子役たちがとても寂しそうだったのが印象に残っている。小規模だからこそではあるが、自分の手でこのような現場を実現できたことは大きな成果であった。

今、映画に限らず、様々な分野でこのような「草の根交流」が行われている。すでに韓流ブームの終焉が囁かれているが、ブームを背景にこのような人的交流が活性化したのは紛れもない事実だ。そして一度張った根はなかなか枯れることはない。このような草の根レベルの交流が、また次の世代の日韓交流の土台になっていくだろうと思う。『けつわり』は映画祭での上映という機会に恵まれたが、このような個人レベルでの活動がより一層注目され、活発化していく環境づくりが望まれる。

※けつわり=仕事を放り出して逃走する人を指す炭鉱用語

## PROFILE

あんどう だいすけ



1983年生まれ。東京外国語大学朝鮮語専攻在学中。自主映画製作のかたわら、韓国のインディペンデント映画・商業映画にスタッフとして参加。2006年、『けつわり』を監督。

# 日韓文化交流基金事業報告

## 日韓共同研究フォーラム

日韓共同研究フォーラムの第3次研究タームの成果として、「日韓共同研究叢書」の第18巻が慶應義塾大学出版会から刊行されました。

### 政治・社会チーム

第18巻『日韓政治社会の比較分析』（服部民夫・張達重編）

「政治的リーダーシップ」「市民参加」「政党」「金融政策」「労働市場」などの側面から、日韓両国の共通点と相違を浮き彫りにする。



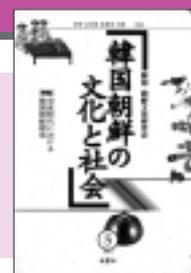
## 学術定期刊行物助成

『現代韓国朝鮮研究 第6号』

(現代韓国朝鮮学会編、新書館)

『韓国朝鮮の文化と社会 5』

(韓国・朝鮮文化研究会編、風響社)



## 報告書

以下の報告書が完成しました。

- 日本教員訪韓研修団<第1団> (2006年5月23日～6月1日) 報告書
- 日本教員訪韓研修団<第2団> (2006年6月20日～6月29日) 報告書

\* 本報告書は基金図書センターにて閲覧が可能です。

## 維持会員

維持会員制度へのご加入ありがとうございました。

2006年9月1日～11月30日の期間に、7名の方に維持会員制度にご加入いただき、7万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。

### 個人会員 7名

片桐正夫

杉山晃一

徐賢燮

徐龍達

辻星児

角田房子

尹勇吉

## 訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
韓国大学生 (第1団)	李徳培 全南大学校日語日文学科 教授	20	7	13	10/31～11/9	東京経済大学、和歌山大学
韓国大学生 (第2団)	朱祥佑 嶺南大学校機械工学部 教授	20	11	9	10/31～11/9	電気通信大学、東北大学
韓国大学生 (外務省招聘)	姜孝昇 外交通商部弘報課 事務官	30	8	22	11/9～11/18	明治学院大学

## 訪韓団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
日本大学生 (外交通商部招聘)	松田茂 外務省広報文化交流部 事務官	30	11	19	10/17-10/26	高麗大学校、浦項工科大学校、 東西大学校 (釜山)



東北大学の研究室にて、災害現場で使われるロボットを操作する韓国大学生訪日団(第2回)



禪武道を体験する日本大学生訪韓団

## 中高生訪日団

団体名	団 長	計*1	男*2	女*2	期 間	訪問校
韓国高校生 (第3回)	崔基淑 紫陽高等学校 校長	54	30	20	9/19-9/23	大阪府立清友高等学校
韓国高校生 (第4回)	崔五圭 景福高等学校 校長	54	17	33	9/26-9/30	大阪府立金剛高等学校

\*1 引率含む \*2 生徒のみ

## 中高生訪韓団

団体名	団 長	計*1	男*2	女*2	期 間	訪問校
三重県中学生	佐々木典夫 津市教育委員会 教育委員長	56	25	25	9/13-9/17	京院中学校 (ソウル)
千葉県中学生	高橋強一 千葉県教育庁教育振興部 次長	54	23	27	9/27-10/1	輪中中学校 (ソウル)
愛知県高校生	国分孝信 愛知県立岩倉総合高等学校 校長	54	18	32	10/25-10/29	紫陽高等学校 (ソウル)
神奈川県高校生	石川裕二 神奈川県立横浜星稜高等学校 校長	54	17	33	11/22-11/26	明德外国語高等学校 (ソウル)

\*1 引率含む \*2 生徒のみ



テコンドー体験で板割りに挑戦する愛知県高校生訪韓団



金剛高校訪問で、クラスに分かれて交流した韓国高校生訪日団(第4回)

## 平成19(2007)年度 公募プログラム案内

### 人物交流助成 申請受付

2007年度(2007年4月~2008年3月)の人物交流助成の申請は、2007年1月4日から2月1日まで受け付けます。

### 学術定期刊行物助成 申請受付

2007年度(2007年4月~2008年3月)の学術定期刊行物助成の申請期間は、2007年2月15日から2月28日まで受け付けます。

※人物交流助成、学術定期刊行物助成とも、年1回の募集となります。詳しくは募集要項をご覧ください。募集要項・申請書は当基金ウェブサイト <http://www.jkcf.or.jp> からダウンロードできますので、どうぞご利用ください。